



7月号

伊藤小だより

令和3年6月30日発行
品川区立 伊藤小学校
校長 石出 浩朗

URL <https://school.cts.ne.jp/ito-e>

寄り添う

校長 石出 浩朗

出勤途中の道で足早に歩く私が追い越す御年配の方とその娘さんであろうかと思われる御婦人がいます。ゆっくりと二人で並んで歩くその姿を見るだけで、何か安らぎを感じます。それは・・・。

御婦人が御年配の方の背中をさすりながら歩いているのです。軽くゆっくりとしたその手の動きから優しさが伝わってきます。手を引っ張るのでもなく、背中を押すのでもなく。そっと背中をさすり続けています。しかし、その手は離れることはありません。御年配の方は、自分の力で歩いています。一步一步、前に進んでいます。御婦人は、その歩みに自分の歩調を合わせています。そして、呼吸をも合わせるかのような御二人の姿が一体になって感じられます。その姿を見ると、心の中にほんのりと暖かな火が灯るような気持ちになります。

私は、この寄り添って歩く御二人の姿に、子どもを育む上の大切なことがあるのではないかと思えてきました。「自分の力で歩く」ということは、子どもの自立、あるいは主体性に当てはまると思います。

手を引っ張ったり、後ろから押すことで、動かすことはできますが、本当の意味での「歩く」ことにはなりません。また、この御婦人が、そっと御年配の方の背中をさすることは「いつでもそばにいるから大丈夫」というメッセージを伝えているように思えます。放任ではないのです。この絶妙なかかわりが、御年配の方の、ゆっくりであるけれどしっかりと歩みにつながっているのだと感じました。

これが、子どもを育む基盤となるかかわり方ではないかと考えました。「自分の力」を伸ばすために、一緒に進みながら、その方向（目標）を示し、「何かあれば、いつでも支えるから大丈夫」という安心感を与えるというかかわり方が、子どもを大きく伸ばすのではないのでしょうか。初めて歩けた時、はじめて自転車に乗れた時、そばにいた大人は、きっとこのように寄り添っていたと思います。

その基盤がある上で、教育の場面では、時には手を引くように導いたり、後ろから背を押すように励ましたりする指導が、効果を発揮するのだと思います。寄り添うことなく、強引に引っ張って指導したり、「頑張れ、頑張れ」と無理に押ししたりすることは、子どもにとって効果がないばかりではなく、心身に望ましくない影響を及ぼすことにもなりかねないという心配もあります。

そのようなことを考えながら、お二人を追い越そうとしたある日、ご婦人から「石出先生ですか？」と声をかけられました。驚いて振り返ると、そのご婦人は、10年以上前に担任をした子どもの御母様だったのです。なんとという御縁なのでしょう。そして、このとき初めて御祖父様のお顔を拝見しましたが、穏やかな笑みの中に、力強い活力を感じました。寄り添う力に導かれたであろうその御姿に、敬服したのでした。

そして、思い出しました。当時、未熟で失敗ばかりしていた私は、いつも保護者の方々に励まされ、支えていただいていたことを。寄り添っていただけたことに再び深い感謝。